

Be My Style

ひと・わざ・みらいへ

現代のライフスタイルにふさわしい発想と感性で、
湖国にCoolな風を起こすものづくりの秘密に迫ります。

丈夫で使い勝手のいい漆器 現代生活に寄り添う日野碗



現存する室町時代後期の日野碗の写し「日野室町碗」を手にする北川さん。漆器制作の他に、博物館の収蔵品の修復やアブリカ制作、ビンテージギターの修理なども手がけている。



幼稚園で使われた子ども碗。3年使用したものの(左)は漆本来の透明感が増し、10年使用すると(右)深い色に変化して木目の美しさが際立つ。毎日2回食洗機・乾燥機にかけられても漆は剥がれていない。漆を再度かけて修理すれば、再び新品同様の光沢を取り戻す。

食洗機も使用できる！
堅牢な漆器として
よみがえった日野碗

目の前に置かれた「日野碗」は写真で見えていたよりもずっと艶やかで、みずみずしい光沢を放っている。手に取ると、漆器ならではの優しい質感がなんとも気持ちよくて思わず両手で包み込む。

漆器の碗は形も色もさほどバラエティーがなく、素人目には違いがよくわからない。掌にしつくりなじんでいる日野碗は、他の漆器とどこが違うのだろうか？

日野碗の歴史は室町時代までさかのぼり、江戸時代には日野商人が商品として全国へ行商したため漆器作りが盛んになった。しかし、日野商人の主力商品が薬に変わると次第に途絶。200年以上にわたる空白の歳月を経て、2004年「日野碗復興の会」の依頼を受けた北川高次さんの手によって日野碗はよみがえった。

今、掌に心地よく収まっているのは、現代の日野碗だ。天然の木材と純粹の漆を素材に使っているのに、食洗機に繰り返しかけても漆が剥がれないほど堅牢ということに驚かされる。

これほど完成度が高い漆器が初めからずんなりできたわけではない。

自分の工房を構えるために京都から日野町に引っ越してきて2年ほど経った頃、博物館収蔵品の修復なども手がけていた北川さんに、地元から日野碗復興の依頼が寄せられた。しかし、昔の日野碗はほとんど現存せず、どのような技法でどんな色や形に作られていたのかもわからない。それでは復元はできないと、話は白紙に戻った。

その後、幼稚園の経営者から「園児たちに本物の器で食事をさせたい。食洗機にかけても壊れない丈夫な漆器を作って欲しい」という相談を受けて、北川さんの中に素朴な疑問が湧き起こった。

「伝統工芸の技法で作った漆器はなんでこんなに簡単に壊れるんや？」

縄文時代の槍の先に塗った漆が土に埋まった状態が残っているくらい、漆は本来とても丈夫な素材。先祖代々伝えられてきた伝統工芸の技術を変更しようなどとそれまで露ほども考えなかった。でも、壊れやすいなんておかしい。木作りと漆塗りの両面から、強度を阻害する原因を突き詰めた。

「原因の工程にかかわる技法を自分で新しく考え出さなくてはいけない。こうしたらどうなるかと実験してみたくなって、仕事かどうかなんて全然関係なくなるんですよ」と北川さんは朗らかに笑う。「その技法で日野碗を作れば世の中にない新しいものができる。そう考えると胸が高鳴りました」



しっとりとした漆塗りが掌になじみ、高齢者も安定して持てる形にデザインされた日野碗「一文字」。中に入れた熱い料理は熱いままに、器自体は熱くならないのも漆器の魅力。

kitagawa kouji 木工作家 北川高次さん

北川木工

江戸時代に「日野碗」で全国屈指の漆器の産地になった日野町。それから200年以上途絶えていた伝統工芸を復興させたいという地元の思いと、たまたまこの町に移り住んだ木工作家・北川高次さんが出会って生まれた現代の日野碗は、伝統技法の弱点を克服した堅牢なつくりです。美しく丈夫な漆器はどのようにして生まれたのでしょうか。



普段使いに最適な帯入りのハソリ(高台あり)。飲みくち部分が反り開き、口当たりが良い。

「日野碗」のこだわり ここがひと味違う！

ケヤキ材の木地……………

樹木が根から水分や養分を吸い上げる導管が太いケヤキは細胞の密度が粗くて、漆が木材に入り込みやすい。漆と木材をしっかりと一体化させて剥がれるのを防ぐ目的で、日野碗の木地には国産のケヤキ材を使用している。



使う人の手になじむデザイン……………

「どの年代の人でも使いやすい、それが僕にとってのデザイン。使いやすいから無意識に手に取る、そういう器が最上級だと考えています」と北川さん。子ども用の碗は無意識に正しい持ち方に誘導できる形であつ倒れにくく、高齢の方用には片手で横からしっかり持ち上げられるように考えられた一文字碗。使い勝手がよくて、食べ物が美しく盛り付けられるフォルムはまさに「用の美」。



1: 減圧真空吸着製法(特許取得)とそのための機械は北川さんが考案した。この技法により、砥の粉(とのこ)と漆を混ぜて木目の穴をふさぐように数回塗り重ねていた下地塗りが省け、木材の収縮により下地が剥がれる漆器のデメリットが克服された。
2: 木地の外側に塗った漆は内側を真空にすることで木材の組織の穴にまで吸い込まれ、内側まで浸透する。茶色の点は減圧真空吸着製法によって内側に染み込んだ漆。

常に世の中にないものを
創り出したい職人気質から
誕生した技法とデザイン

「職人には二つのタイプがあります。同じことを繰り返して継続できる職人と、同じことをするのは苦痛で、常に世の中にない新しいものを生み出していくことが得意な職人。僕は完全に後者なんです。望まれている以上のものを提供するというスタンスで仕事をしています」

大学卒業後、サラリーマン生活になじめず半年で退職した北川さんは、学生時代から好きだったものづくりの現場へ。まず伏見稲荷で造作仕事に携わって木工を学び、その後、オーダー家具を制作するなど次々に舞い込む新しい依頼に応えた。さらに人間国宝の故・黒田辰秋さんの工房に在籍し、木工から漆芸まですべての工程を身に付ける。工程ごとに細かく分業化されている漆器制作の世界で、一人で全工程ができるのはきわめて珍しい。

新しいことに挑戦するのが大好きな北川さんが喜々として試行錯誤した末、ついに「新しい日野碗」は完成した。木地は木目が粗くて漆がしっかりと浸透するケヤキ材。特殊な製法で精製され熱にも強い漆をたっぷり使い、北川さんが独自に考案して特許を取

得した減圧真空吸着製法によって木地と漆を細胞レベルで密着させて食洗機・乾燥機にも耐える丈夫さを実現した。

デザインも使いやすさが第一。子ども碗は自然に正しく碗を持てるように縁の角度と高台を工夫し、重心を下げて起き上がりこぼしの構造にしている。さらに、高齢の母親の指先がうまく動かず器を倒してしまうのを見て、高齢者が安定して持てる形状の一文字碗も考案。手に持った時に気持ちいいと感じた秘密はここにあったのだ。

すっきりとシンプルで美しい日野碗を日常生活で惜しげなく使い、艶やかな餡色になるまでこの手で育ててみたくなった。

DATA

北川木工

蒲生郡日野町小井口50-6

TEL.0748-52-6066

090-8387-4902

<http://hinowan.blogspot.jp/>

★日野碗 ハソリ(高台あり)時代塗り赤・黒セットを1名様にプレゼント。詳しくは21ページ参照

